

# 空襲警報の音 上空を飛び交うB29

## それが「日常」だった

### 終戦から70年

昭和20年8月、第二次世界大戦終結。昭和12年の日中戦争勃発から約8年もの間続いた戦争が終わりを告げて70年―。

国を守るため、多くの尊い命を犠牲にしてきたあの頃。何度も戦争を繰り返してきた日本は今、戦争の悲惨さを訴え続けています。もう二度と同じ過ちは繰り返すまいと、体験者の誰もが声を上げ、訴え続けています。

### 不安と恐怖の日々

鬼北町では幸いにも大きな空襲はなかったと言われています。しかし、全く影響がなかったわけではありません。

当時、それぞれの地域には2〜3軒ごとに隣近所と協力して作った防空壕がありました。いつ鳴るか分からない空襲警報に怯える日々。特に夜になると、その頻度は高くなっていったそうで、いつでも逃げられるようにと枕元にはいつも防空頭巾

と靴が置かれていました。上空を飛び交うB29の姿に怯え、時には大雨の中、防空壕へ避難することもありました。

### 「戦争」が日常でした

「目立つものは目立たないように」が教訓だった戦時中。蔵などの白い壁はみんな協力して黒く染め、電気は明かりが漏れないようにと黒いもので囲み、敵機に見つからないようにひっそりと暮らす日々。学校でも当然のように防空訓練が行われていました。

20歳になれば徴兵検査を受け、合格すれば訓練を受け、戦地へ。女性たちは地域を、家族を守るため消火訓練や竹やり訓練に精を出します。今では考えられない光景、それが「日常」でした。

### 召集令状の重み

みんなが身を寄せ合って生活していた日々。「家族全員が一緒にいられるだけで…」その思いすらも打ち砕いてしまうのは、突然手

元に届く「赤紙」と呼ばれる召集令状でした。鬼北町ももちろん例外ではなく、「戦争に行くのが当たり前」と、当時多くの人が戦地へ向かったと言います。

戦争に行く人は「英雄」として盛大に見送られ、戦死者は「名誉の戦死」として称えられた時代。中には「親を守るために」と自ら志願兵となり、戦地へと出征する若者もいました。

しかし、遺された家族にとつて、父を亡くしたことを「名誉」とは受け取れない現実。「名誉」よりも「生きて帰ってほしかった」誰もがそう思ったことでしょう。

出征するあの日、近永駅まで見送った父の背中。「英雄」として送り出したその光景が、今では辛く悲しい思い出に変わっています。

### 「もう二度と…」強く願う

これから先、100年経っても、それ以上の月日が流れても、絶対に忘れてはいけない「戦争の悲惨さ」。

戦争を繰り返すことは、流れたたくさんの血と涙を無駄にすることと同じことです。

戦争に傷つき、二度と思い出したくないであろう記憶を掘り起し、懸命に伝え続けてくれる戦争経験者の人たち。どんな思いで語ってくれているのでしょうか。古傷をえぐるような、そんな思いかもしれません。それでも戦争のない世界を願う、この日本の平和がいつまでも続くことを願い、戦争の恐ろしさを訴え続けています。

戦争とはほとんど縁がなかったかのように感じられるほど、穏やかな鬼北町。しかし、こんな小さな町にも戦争の犠牲となった人たちは多く存在しています。戦地に行った人、家族が戦死した人：それぞれの立場で見た戦争を語ってもらいました。

悲惨な戦争の姿から、決して目を逸らさないでください。